

青いランプ

小川未明

不思議なランプがありました。青いかさがかかっていた。火をつけると、青い光があたりに流れたのです。

「このランプをつけると、きっと、変わったことがあるよ。」といって、その家では、これをつけることを怖ろしがっていました。しかし、前から大事にしているランプなので、どこへもほかへやることをせずに、しまっておきました。

石油で火を点ける時代はすぎて、いまでは、どんな田舎へいっても、電燈をつけるようになりましたが、まれに、不便なところでは、まだランプをともしているところもあります。

この村でも、しばらく前から、電燈をつけるようになりました。そして、ランプのことなどは、忘れていましたので、不思議なランプの話が出ると、みんなは笑い出しました。

「そんなばかな話があるものか。この文明の世の中に、化け物や、悪魔などのいようはずがない。昔の人は、いろいろなことをいって、ひまをつぶしたものだ。それがうそなら、青いランプを出して、つけてみればいい。」と、たまたま集まった人たちはいいました。

すると、家の人は、

「変わったことがあっても、なくても、そういういい伝えだから、めったなことはするものでない。」と、口をいれたのです。

「いいえ、それは迷信というものだ。今夜、青いランプをつけてみようじゃないか？」と、家の人のうちでも、きあわせた人たちと、口をそろえていったものもありましたので、つい、しかたなく、反対したものも同意することにしました。

みんなは、日の暮れるのを待っていました。そして、しまっていた、昔のランプを出してきました。

幾十年前からかきしめない、石油のしみや、ほこりが、ランプのガラスについていました。

「石油が、一たれもはいていない。」

一人は、のぞいてみながら、

「いつ、つけたかわからないのだから、かわいてしまったのだ。」といいました。

石油を持ってきて、ランプに注ぎました。そのうちに、日は、暮れてしまいました。窓からは、北の荒い海が見えます。秋から冬にかけて、雲のかからない日は少なかったのであります。冷たそうな雲が、沖にただよって、わずかに、うす明かりが残っていました。

「さあ、ランプをつけるから、電燈を消すのだよ。」と、一人がいいますと、急にみんなは、ぞっとして、だまってしまいました。へやの中は、まっ暗になりました。あたりが静まると、浪の音が、ド、ド、ドンと聞こえてきました。マッチをする音がして、ランプに火がつくと、

へやの中はちょうど春の晩のように、ほんのりと青くいろどられて、その光は、窓から、遠く海の方へ流れてゆきました。

みんなは、しばらくだまっていたが、

「どうして、このランプを不思議なランプというのですか？」と、だれかがたずねました。

おそらく、そのわけを知っているものは、この家の年とったおばあさんだけでありましょう。が、いままで、おばあさんは、このことをくわしくだれにも話しませんでした。

「このランプは、大事な、不思議なランプだから、しまっておくのだ。」と、ただ孫たちにいっていたばかりです。

「おばあさん、どうかそのお話を聞かしてください。」と、近所の子供たちも、大人たちも、そこにすわっておられたおばあさんにたのみました。

「じゃ、その話をきかしてあげよう。」と、おばあさんは、青い光にいろどられたへやの中で、みんなに向かって、つぎのような物語をされたのであります。

* * * * *

おばあさんのお父さんという人は、こんなさびしい片田舎に産まれた人に似ず、研究心の深い人でありました。

いつも、暗い、ものすごい海の方を見て考え込んでいました。「どこか、あちらにみんなの知らない国があるにちがいない。また、発見されないような島があるにちがいない。それには、もっといい船を造って、探検に出かけることだ。」などと考えていました。

ある日、海の上が、たいへんに荒れました。

「こんな日に、沖へ出ているような船はないだろうな。出ていたら、助かるまい。」と、お父さんは、まゆをひそめてながめていました。

いつしか、あらしのうちに日は暮れてしまいました。夜になってから、ますます沖は荒れ狂って見えました。このとき、一つ真っ暗な海の上に、赤い火が見えたのであります。その火は大きな波にもまれて、おどっていました。

「火が、火が、この大あらしに、船がなやんでいる。どこの船だろう……。」と、お父さんは、窓に立って見ながら気が気でありませんでした。しかし、この海岸で、船を出そうというような人を、さがしてもどこにありましょう？

「あれ、あれ。」といううちに、その赤い火は見えなくなってしまいました。まったく大きな波に呑み込まれてしまったものと思われまます。そして、あとは、ただ波の音と風のさけびと雨の吹きつける声がきこえるだけであります。

あくる日、海岸では、大騒ぎでした。一人の勇敢な外国人が難破船から、こちらの燈火を目あてに、泳いできて、とうとうたどりつくと力がつきて、そこに倒れてしまったのです。

これを知った村の人々は、その外国人をいたわってやりました。

おばあさんのお父さんも、しんせつに介抱してやった一人であります。外国人は、やっと元気を回復しました。そして、手まねで、昨夜、船が難破して、乗っていたものは、みんな死に、貨物はすっかり海の底にうずもれてしまったことを告げました。

「それでも、あなたは勇敢な人だ、よくここまで泳いでこられたものだ。」と、お父さんはその外国人を尊敬しました。外国人も、またお父さんに親しみました。おばあさんのお父さんは、外国人について、外国の言葉をならいました。それから、いろいろあちらの文明な話や、まだ人のたくさんゆかないような土地で、宝や、珍しいものが無尽蔵にある話などを聞きました。

「ああ、私の思ったことは、空想ではなかった。ぜひ、いって大きな仕事をしよう。」と、お父さんは思いました。

外国人もだんだんこちらの言葉がわかり、そして、お父さんと話がいくらかできるようになりました。

「もし、人の知らない島を発見したいというようななお考えをもたれたら、一度、外国へ渡って、学問をして、それから、遠い、遠い、船出をしなければなりません……。」と、外国人は、さとししました。

お父さんは、なるほどとうなずきました。外国人は近所に、小さな家を建て、そこに住みました。家のまわりにはいろいろの草花の種子をまきました。夏になるとそれらが、赤・黄・緑、さまざまの花が咲いて美しかったです。ちょうや、はちは、終日花の上を飛びまわっていました。外国人はそれを見て、自分のふるさとのことなどを思い出していました。

どうかして、国へ帰りたと思いましたけれど、どうすることもできなかったので、自分は、一生をこの村で送るのでないかと考えたこともあります。お父さんは、よくこの人をたずねてゆきました。そして、あちらの話を聞いたり、言葉などをならったりして、家へ帰ると、窓のところで、青いランプをともして、夜おそくまで勉強をしました。ランプの青い光は、海の方からも見えたのであります。

ある夏の午後、外国人は、遠眼鏡で沖の方を見ていました。すると、あちらの水平線を大きな黒い船が通るのでした。それは、一目で、この国の船でないことがわかりました。だんだんはっきりと見えると、マストの上に、自分の国の旗がひらひらとひるがえっていました。

「あ、なつかしい、自分の国の船だ！」と叫ぶと、お父さんのところへ駆けてきました。

「いま、あっちを、私の国の船が通ります。これは、神さまのお助けです。どうかして、あの船に合図をして、乗り込むことはできないのでしょうか。」と訴えました。

しんせつな、正直なお父さんは、これを他人のこととは思いませんでした。

「どれ、私に、その眼鏡をおかしてください。」と、自分の目にあてて沖を見ながら、
「なるほど、りっぱな大きな船だ。この船を逃がしたら、いつまた乗れるというあてはあり
ますまい。すぐに、合図をしましょう。」と、近所の人々を呼び集めて、海岸の小高
いところで、火をどどんときました。

人々が、外国人を助けたいというまごころが、あちらの船に通じたとみえて、船から、汽笛
の音が、三たびきこえました。

「あれは、わかったというしらせにちがいない。」

みんなは首をのぼして、沖の方を見つめていますと、だんだん、黒い船の姿が、大きく
はっきりとしてきました。

これを見た外国人は、声をかぎりに叫んで、狂わんばかりに喜びました。

「さあ、あなたも私と一しょにいらっしゃい。」と、かたわらに立っているお父さ
んの首に抱きつきました。

お父さんは、日ごろから、外国へ行ってみたいと思っていました。しかし、そのころ、そ
んなことがどうして容易にできましよう。まことに、これこそいい都合でありました。

「どうか、それなら、私をつれていってください。」と、お父さんも、熱心に頼みました。

おばあさんは、まだ小さな娘でありました。お父さんが、荒海を越えて、あちらの外国
へゆかれると聞いたので、どんなに、それを悲しみましたでしょう。もう、ゆけば、二度と
帰ってこれないもののように思われたからです。そして、おばあさんのお母さんといっし
よに、「お父さん、外国へなど、ゆかないでください。」と願いました。

「なに、心配することはない。きっと、無事に帰ってくるから。」と、お父さんは答えて、
いくらやめさせようとしてもだめでした。

母と娘は、お父さんの決心が固いを知ると、せめて、そのお帰りを待つよりしかたの
ないのを悟りました。

「そんなら、いつお帰りなさいますか、教えてください。」と、二人はいいました。

「じゃ、約束をしよう。いまから五年めにきつと帰ってくるから。」と、お父さんは答えま
した。

汽船からは引き下ろされた小舟が、陸を指してきました。それから、しばらくして、外国人
とお父さんはその小舟に乗りました。小舟は晩方の金色に輝く波を切って、ふたたび陸を
はなれてあちらに泊まっている汽船をさしてこぎました。海鳥は、美しい夕空におもしろ
うに飛んでいました。

母と娘と近所の人たちは、名残惜しそうに、目に涙を浮かべて、沖の方をながめていま
した。小舟は小さく、小さくなって、いつしか船にこぎつくと、人も舟も、同時に、引きあ

げられて、船は、暮れてゆく空に汽笛を鳴らして、いずこへともなく去ってしまいました。

絵で見ると、お父さんのゆかれた外国には、りっぱな町があって、馬車が通っています。また、男も、女も、思い思いに、きれいなふうをして歩いています。お父さんから、いったきり、たよりがありませんでした。留守をしている、家の人々は、ただ五年のあいだの早くたつのを待っていました。

外国人の住んでいた家は、空き家になって、だれも住んでいませんでした。ただ、夏がくると、家のまわりには、いろいろの草がしぜんに芽を出して、赤・白・紫・黄の花を美しく咲かせました。そして、沖から吹いてくる風は、それらの花を動かしました。ちょうや、はちは、朝から、集まってきて、日の暮れるころまで、楽しく遊んでいました。

「お父さんは、無事にお帰りなさるだろうか？」

「あの外国人でさえ、ああして、帰っていったのだもの、人の思いの通らないことはない。きっと五年たったら、お父さんは、帰っておいでなさる……。」

一年は、また一年とたつてゆきました。年々種子が残って咲いた草花も、その後、だれも手をいれるものがなかったので、外国人の住んでいた家の荒れるとともに、花の数は少なくなっていました。こうして、ついにお父さんの帰るといわれた五年めとなったのであります。

お母さんは、お父さんの留守の間に、ランプの下で、さびしく仕事をしていました。このあたりの海は、十月の末になれば、波が高くて、どんな船も、あまり通ることはなかったのです。

「もう、お父さんは、お帰りなされそうなものだ。」

こういつて、娘と母は、毎日のように、海岸に立っては、船のはいつてくる、影を待っていました。しかし、夕焼けの美しかった夏には、とうとうお父さんは帰ってこられませんでした。

「今年は、お父さんは、お帰りなされんのだろうか？」と、娘がいうと、

「いいえ、お父さんは、約束なされたことは、けっしてお違いなされはしない。きっと、今夜あたり、帰っておいでなさるだろう。」と、お母さんは、なにか虫が知らせるのか、かたく信じて、いつものごとく、青いランプに火をつけて、窓ぎわにすわって待っていました。

その日は、なんとなく、家の人々の胸さわぎのする晩でした。

「今夜は帰っておいでなさる。」と、お母さんは信じて、暗い海の方を見ていられると、ふいに夜嵐の窓に吹きつけるように、幾羽ともなく、黒い海鳥が、青いランプの火を目がけて、どこからともなく飛んできて、窓につきあたったのであります。

お母さんは、神さまや、仏さまを、口のうちでお祈りをして、どうか、お父さんの身の上うえに変わりのないようにと願ねがいました。そして、一夜まんじりとも眠りませんでした。

その翌晩も、どこからともなく、黒い鳥が青いランプの火を目がけて飛んできました。毎晩、青いランプに火をつけると、どこからともなくこの黒い鳥の群れが、押し寄せてきたのであります。みんなは、このランプを気味悪きみわるがりました。そして、不思議ふしぎのランプとして、もうそれをつけないことにして、しまったのであります。

そして、お父さんは、とうとう帰かえってこられませんでした。

* * * * *

これが、おばあさんのお話はなしであります。そのときのお母さんは、もうとっくに死しんでしまい、そのときの娘むすめさんは、この物語ものがたりをしたおばあさんなのでした。

「そのお父さんは、どうなされたのでしょうかね。」と、このへやあつに集ひとまった人たちは、おばあさんにたずねました。

「外国がいこくから、こちらへくる船ふねがなかったものか、それとも、どこかの島へ渡しまって、自分わたの思じぶんったような仕事おもをなされたものか、わからないのだよ。」と、おばあさんこたは、答えました。

「いまでもわかりませんか？」

「私わたしが、こんなにおばあさんになったのだから、もう、お父さんは、この世とうにおいでなされるはずはないでしょう。」

みんなは、これを聞いて、さびしい気持ちきもちがしました。青いランプの火は、その昔むかしのよあうに、青い光あかりをいまもへやの中なかにただよわせています。

「黒い鳥が、今夜も飛んでくるかしらん。」と、子供こどもたちは、いいました。

だれも、これについて、はっきり答えるものはありませんでした。そして、みなは、おばあさんかおの顔かほを見ました。おばあさんは、うつむいて、遠い昔むかしのことを思い出すように、また、岸きしに打うつ波なみの音おとに聞ききいっているように、じっとしていられました。

「おばあさん、黒い鳥が、今夜も飛んでくるでしょうか？」

「もう、そんなこともあるまい。あの時分じぶん、国くにへ帰かえりたい、帰かえりたいと、お父さんが、毎夜まいよ思おもっていなされたから、鳥とりになつてきなされたのかもしれないが、もう、そんなことはないだろう。」と、おばあさんはいわれました。

はたして、その夜よは、なんの変かわったこともなく、秋あきの海うみは、すすり泣なくように静しずかにふけていったのであります。